様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１２１２０

研究課題名（和文）看護教員を対象とした協働参加型授業改善プログラムの構築と検証

研究課題名（英文）Development and Verification of a Collaborative Participatory Class Improvement Program for Nursing Teachers

研究代表者
坂　美奈子（Saka, Minako）

佐賀大学・医学部・助教

研究者番号：３０７６８５９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：プログラムは，230名の看護教員の授業設計における思考内容調査に基づいて構築した。そして，専門学校3校の看護教員21名を対象にプログラムを実施し，発言内容の質的分析および授業設計思考評価表，一般性自己効力感尺度（GSES）をもとに検証を行った。結果，質的分析では，20のカテゴリーからなる学びが生成された。思考評価表では，2つの項目が実施前に比べ実施中，実施後に上昇した。GSESも実施前に比べ実施後に上昇した。プログラムは，学生に関する見方，考え方を生み出し，新たな教授方略を見出すこと，省察が促進され，自己効力感が向上することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの教育学や看護教育学で行われている授業改善や授業研究などの研修プログラムは，教師，看護教員が単に実践し，その場の意見を学びや成長として明らかにした報告が多かった。しかし，本研究では，熟練教員の授業における思考内容を量的に検証して授業改善のプログラムを構築し，構築されたプログラムの実証研究を行った。プログラムに参加した看護教員の成長を質的・量的に測定することで，授業や学生に関する新たな学びや自己効力の向上を証明できたことは，本研究の独自性かつ新規性であると考えられる。また，研究をベースにプログラムを開発することは，エビデンスレベルの高いプログラムの提供の必要性を証明できたと考える。

研究成果の概要（英文）：The program was developed based on the study of 230 nursing teachers' thinking of how to design nursing classes. The verification of program was conducted based on data from 21 nursing teachers at 3 nursing schools, by qualitative analysis of remarks, data from the class design thinking evaluation scale, and general self-efficacy scale (GSES). The qualitative analysis revealed 20 categories wherein learning occurred, such as "discovery of students' learning ability and attitude" and "rediscovering learning method." In the thinking evaluation scale, the items on 'Understanding student readiness' and 'Reflection of past classes' increased midway of the program and were higher after the program. The scored on GSES also increased subsequent to the program. Therefore, the findings suggest that this program creates an understanding about students and new teaching strategies. Further, it also showed that reflection and self-efficacy improved after the program.

研究分野：看護学教育

キーワード：看護教員　授業改善　プログラム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.　研究開始当初の背景

看護系大学はこの 10 年で 100 校以上も増え、看護教員の教育に関する質的充実が課題である（文部科学省, 2011）。また、看護専門学校でも、看護教員の継続教育に不備があり、教員の質の確保が難しい（厚生労働省, 2010）。看護教育を充実させるためには、看護教員の教育に関する質の確保が必須であり、各教員の授業内容や教授方法の見直しについて組織的に取り組める仕組みを設ける必要がある（厚生労働省, 2011）。

小中学校などの教師は、自らの授業を振り返りながら分析したり、複数の教師で指導案を作成し授業参観を行ったりなど、組織的に授業改善に取り組んでいる（中原, 脇本, 町支, 2015）。この組織的な取り組みは、教師自ら授業内容や教授方法を見直すとともに、自分の授業を見直す力や実践的な力量を向上させ、授業の新たな見方、考え方を学ぶことにつながる（的場, 柴田, 2013）とされている。しかしながら、教師の力量や質の向上には、教師個人が授業経験を丁寧に振り返るだけでなく、教師同士が協働して行うこと（木原, 1998）、そして知識を持ち合いながら次の授業を設計し、実践していくプロセスが非常に重要である（中原, 脇本, 町支, 2015）。

看護教員の校内研修（FD を含む）の取り組みに関する文献検討（坂, 長家, 2016）では、看護教員は、授業内容や教授方法を振り返るのみにとどまっており、その振り返りをもとに新たな授業を再設計していく授業改善への取り組みは行われていなかった。つまり、看護教員が行っている取り組みは、協働して授業を振り返り、授業を再設計していくことで得られる授業に関する学びや教育に関する質の向上にはつながっていない。

また熟練看護教員の授業設計時の思考の研究（坂, 大池, 原田, 能登, 道面, 2016）では、看護教員は、看護教員として培った経験のみならず、看護師として培った経験をもとに、授業の内容や教授方法を見出すという看護教員ならではの思考があることが明らかとなった。

よって、本研究では、看護教員ならではの思考を活用しながら、看護教員が協働して授業の課題を解決し、授業を再設計していくことができる授業改善プログラムを構築し検証することとする。このプログラムを構築することは、看護教員が主体的に授業における課題を解決するための手法を提示するとともに、プログラムを通して、授業の新たな見方、考え方など学ぶこととなり、看護教員の教育に関する質の向上にもつながる。

2.　研究の目的

看護教員が協働的に授業経験を振り返り, 新たな教授方略を見いだし実施することで, 授業に関する見方, 考え方を学び, 教授活動を向上させていくための授業改善プログラムを構築し検証する。

3.　研究の方法　（本研究は、2 段階に分け研究を行うこととした。）

研究 1：本研究の対象となる看護教員を特定し、プログラムに必要とされる内容を明らかにすることとした。

1）研究デザイン：無記名自記式質問紙調査

2）調査項目の作成

先行研究（坂, 長家, 2016）をもとに、A 授業設計に関する悩み、B 研修参加の目的、C 参加している研修内容、D 所属機関による研修の在り方に関する調査用紙を作成した。また、研究対象者の思考の在り方やプログラムに必要とされる内容を明らかにするため、先行研究（坂, 大池, 原田, 能登, 道面, 2016）の質的研究で使用されたコードをもとに E 調査項目（47 項目）作成した。

3）調査方法

⑴ 研究対象者の選定

日本看護系大学協議会に登録している会員校から 50 校および日本看護学校協議会の会員校一覧より 100 校を目標値として設定し、大学および看護学校数が多いとされる関東地区、近畿地区および九州沖縄地区から無作為に抽出した。

看護系大学の学部長もしくは学科長および看護専門学校の学校長もしくは副学校長、教務主任宛てに、研究への協力を依頼し、協力をいただける看護教員の数を確認した。協力が得られた看護系大学、看護専門学校へ、再度協力をいただける人数分の研究の説明書および調査用紙、返信用封筒を送り、配布を依頼した。調査に同意が得られた研究協力者に対し調査用紙の返信を依頼した。

⑵ データ収集期間及び収集方法

データ収集期間：平成 29 年 7 月中旬から 8 月

協力が得られた看護系大学及び看護専門学校の代表者に，研究に関する説明書および調査用紙，返信用封筒を研究協力者へ配布してもらい，調査に同意が得られた研究協力者に対し調査用紙の返信を依頼した。

4) 分析方法

⑴ 授業設計の悩みと研修参加の目的（調査項目 A・B）

授業設計に関する悩みの有無および悩みの内容と研修参加の有無および参加目的については、所属機関でχ二乗検定を行った。

⑵ 所属機関における研修のあり方と参加している研修内容（調査項目 C・D）

研修のあり方と研修内容を明らかにするため、所属機関ごとにχ二乗検定を行った。

⑶ 研究対象者の思考の在り方（調査項目 E）

項目分析後、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子分析で明らかとなった下位因子を所属機関の看護教員で比較した。正規分布が認められない因子が存在したため，Mann-Whitney－U 検定を選択した。分析には，SPSS Statistics V.23.0 for Windows を使用した。

⑷ プログラムに必要とされる内容（調査項目 E）

因子分析で明らかとなった下位因子を観測変数としてパス解析を行った。なお，データの解析には，SPSS Amos（ver.25.0 for Windows）を使用した。

研究 2：研究 1 で得られた結果をもと作成されたプログラムを実施し、授業に関する見方、考え方を学び、教授活動が向上したのか検証することとした。

1) 研究デザイン：アクションリサーチによる介入研究

2) 調査方法

⑴ 研究参加者の選定とリクルート方法

看護専門学校の学校長もしくは副学校長、教務主任へ、研究の趣旨に関する説明文書の送付を口頭にて確認した。説明文書の送付に了承が得られた看護専門学校に説明文書を送付し、研究への協力の可否の返信を依頼した。研究への協力が得られた看護専門学校を訪問し、研究概要および本プログラムについての説明を実施した。説明後あらためて各看護教員に研究参加の意思を確認し、参加の意思を示した看護教員へ同意を得た。

⑵ データ収集期間

平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月

⑶ データ収集方法

①授業改善プログラム実施による学びの明確化（質的検証）

研究参加者には，研修会参加毎に，個人ジャーナルを作成してもらい、また、プログラム実践中の参加者の対話記録を録音し，逐語録を作成した。個人ジャーナルと逐語録をデータとした。

②授業改善プログラム実施による授業設計思考評価表および GSES の得点比較（量的検証）

思考の在り方を評価するため，研究 1 での研究対象者の思考の在り方（調査項目 E）および一般性自己効力感尺度（GSES）を用いて、研修実施前、中（プログラム2回目終了後）、全プログラム実施後に無記名自記式質問紙調査を行うこととした。

4) 分析方法

⑴ 授業改善プログラム実施による学びの明確化（質的検証）

データからコード化，サブカテゴリー，カテゴリー化を行った。

⑵ 授業改善プログラム実施による授業設計思考評価表および GSES の得点比較（量的検証）

授業設計思考評価表は，プログラムによる研修会の実践前と中および実施前と後，実施中と後について，Wilcoxon の符号付順位和検定を行い，Bonferroni にて多重比較の調整を行うこととした。GSES も研修会の実践前と中および実施前と後，実施中と後について，一元配置分散分析を行うこととした。

研究 1 および 2 での倫理的配慮

本研究を開始するにあたっては，国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を受けた（許可番号 16-Ifh-058、

17-Ifn-021）。

4.研究成果

研究 1

1）配布数および回収数、分析対象者数

質問紙に協力が得られた大学は 15 校/50 校、専門学校は 37 校/100 校の 52 校であった。質問紙を配布した人数は、大学 295 人、専門学校 288 人で、583 人だった。そのうち質問紙の回収数は、289 人（回収率 49.6%）であり、欠損を認めた 59 人を除き、230 人（有効回答率 39.5%）を分析対象とした。

2）授業設計の悩みと研修参加の目的（調査項目 A･B）および所属機関における研修のあり方と参加している研修内容（調査項目 C･D）

授業設計に悩みがあると回答した人は、215 人（81.7%）であった。悩みの有無では、所属機関で差は見られなかった。悩みの内容に関しては、「5.学習効果を高める教材を見出せない」（P＝0.010）と「9.教科書を伝えるだけの講義しかできない」（P＝0.022）にて専門学校の教員の方があるとなった。研究参加の目的では、「6.専門領域の看護の知識を得たい」（P＝0.031）で専門学校の教員が多く、「7.所属機関の長、上司の命令」（P＝0.001）は大学教員が多いとなった。

研修のあり方は、「1.所属機関内で定期的に開催される研修会がある」（P＜0.001）では大学教員が多く、「2.所属機関内ではないが、外部の研修会に参加できるようになっている」（P＜0.001）にて専門学校教員が多いとなった。大学教員は、「1.あなたが所属している機関で行われている FD」（P＜0.001）、「2.全国規模学会」（P＝0.009）などが多く、「5.日本看護協会が主催する研修･ワークショップ」（P＜0.001）、「6. 出版社などが主催する研修･ワークショップ」（P＜0.001）などは専門学校の教員が多かった。これにより、授業に対し悩みを持ちやすいものの、自施設での研修がない看護専門学校の看護教員の方がプログラムの必要性があると考えられた。

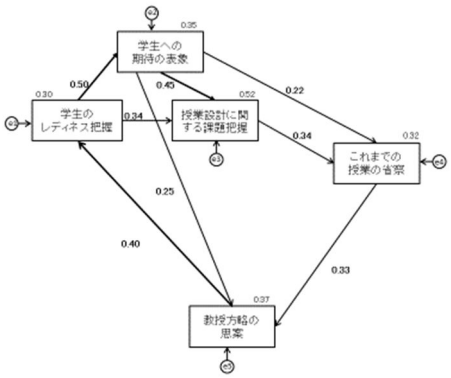
3）研究対象者の思考の在り方（調査項目 E）

各因子の思考あり方を比較した結果、『教授方略の思案』と『これまでの授業の省察』が 1%水準で差があった。授業を創り上げる際、専門学校教員の方がこれらの思考に不足があることが予測され、プログラムにて思考するトレーニングが必要であると考えられた。

			『教授方略の思案』			『学生のレディネス把握』			『学生への期待の表象』			『授業設計に関する課題把握』			『これまでの授業の省察』		
	n	%	中央値	四分位範囲		中央値	四分位範囲		中央値	四分位範囲		中央値	四分位範囲		中央値	四分位範囲	
所属																	
大学	83	36.1	29	(26-34)	**	18	(16-21)		18	(15-20)		22	(19-24)		17	(15-18)	**
専門学校	147	63.9	27	(23-30)		18	(16-20)		18	(15-19)		22	(18-25)		15	(14-17)	
Mann-Whitney-U			＊p＜.05		＊＊p＜.01												

4）プログラムに必要とされる内容（調査項目 E）

因子分析にて抽出された因子を観測変数としてパス解析を行い、モデルを作成した。モデルの適合度は、χ二乗＝4.407（P値＝0.110）, GFI ＝0.992, AGFI＝0.943, RMSEA＝0.072 であった。プログラムの内容として、『学生のレディネス把握』したのち、『学生への期待の表象』し、『授業設計に関する課題把握』し、それをもとに『これまでの授業の省察』を行う。そして、振り返った内容をもとに『教授方略の思案』し、授業を実践したのち、再度学生の様子などを振り返るプログラム構成が適していると考えられた。よって、この結果をもとに4単元で構成するプログラムの構築を行うこととした。



研究 2

1）対象者の概要

研究参加に同意を得られた看護専門学校（3 年課程）は 3 校であり、看護教員は計 21 名であった。参加者の年齢

は、20～50 歳代（平均 42.1 歳）、女性が 18 名、男性が 3 名であった。教育経験年数 0～21 年（平均 5.2 年）だった。

2）授業改善プログラム実施による学びの明確化（質的検証）

プログラムの4単元ごとに明らかとなったカテゴリー【】を示す。

単元 1 では、授業が【学生との相互作用のない講義】であり、看護教員自身の【授業力の不足】や【偏った学生の見方】をしていることに気付きを得ていた。そして、【教育の捉え直し】を行いつつも、【効果的な教授方法への示唆】を考えてみたり、【授業に影響を与える外的要因】に視点が向いてしまったりなどが表れていた。単元 2 では、【学習効果を高める教授方略】や【教授方略の秘訣】を見出していた。そして、【新たに考えた授業への懸念】を抱きつつ、【学習成果の予測】をしたり、【学生の学習行動変化への期待】をしたりなどの自己の考えが表れていた。単元 3 では、【学習方略における意図】を明らかにし、【学びの成立に関する課題】を想定していた。そして、【学びを導く学習環境の設定】や【学生に適した学習内容・方法の吟味】という実践を想定した具体的な案を表していた。単元 4 では、【学生の学習能力・態度における発見】という学生への見方の変容があった。そして、【授業実践における自己の課題】や【改善後の授業結果】を捉え、その捉えたことをもとに【授業設計における基盤の再獲得】や【学習方法における再発見】という新たな教授方略の獲得について表れていた。

3）授業改善プログラム実施による授業設計思考評価表および GSES の得点比較（量的検証）

思考の在り方は、『学生のレディネス把握』の前と後、『これまでの授業の省察』の前と中および前と後にて有意差が見られた（p＜.05）。GSES は、実施前と後にて有意差が見られた（p＜.05）。

これらの結果から、看護教員は、プログラムを実践することで、学生に関する見方、考え方を捉え直し、学生を意識して授業を構築、実践したことで、学生に関する新たな発見をすることができる。そして、教員自身が自ら考えながら進めることで授業への自信につながりやすく、自己効力を向上させると考えられた。また、振り返りを充実させたことから、授業の省察も促進されることが明らかとなった。

		中央値	（四分位範囲）	有意確率[a]
教授方略の思案	前	26.00	(23.5-28.5)	
	中	26.00	(22.5-30.0)	
	後	27.00	(25.5-30.5)	
学生のレディネス把握	前	14.00	(12.0-17.0)	＊
	中	15.00	(13.5-18.0)	
	後	18.00	(15.0-19.5)	
学生への期待の表象	前	16.00	(13.5-18.5)	
	中	16.00	(14.0-18.5)	
	後	16.00	(14.5-18.0)	
授業設計に関する課題	前	17.00	(16.0-19.5)	
	中	20.00	(16.5-23.5)	
	後	20.00	(16.5-24.5)	
これまでの授業の省察	前	13.00	(11.0-14.0)	＊
	中	14.00	(12.0-15.0)	
	後	15.00	(13.5-17.0)	

Wilcoxon の符号付き順位検定
a．多重比較の調整：Bonferroni

	実施前		実施中		実施後		多重比較[a]
	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)	
一般性自己効力感	45.9	(2.3)	48.8	(2.6)	50	(2.2)	実施前＜実施後＊

一元配置分散分析（対応あり）
a．多重比較の調整：Bonferroni

＜引用文献＞

木原俊行.授業研究と教師の成長.大阪:日本文教出版,2013:155-200

厚生労働省.2011.看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf 2014.2.3

厚生労働省.2010.今後の看護教員のあり方に関する検討会報告.http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf 2014.2.3

的場正美,柴田好章（編）.授業研究と授業の創造.広島:株式会社渓水社,2013:79-95

文部科学省.2011.大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm 2018.2.27

中原淳,脇本健弘,町支大祐.教師の学びを科学する-デ-タから見える若手の育成と熟達モデル-.京都:北大路書房,2015:15-33

坂美奈子,長家智子.看護基礎教育機関における校内研修に関する動向と課題.インターナショナル Nursing Care Research 2016;15（3）:115-123

坂美奈子,大池美也子,原田博子ら.看護専門学校の看護教員の授業設計における思考様式-看護学概論担当の看護教員を対象に-.日本看護学教育学会誌 2016;26（2）:57-68

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 坂美奈子	４．巻 17
２．論文標題 看護教員の研修の実態と課題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	６．最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂美奈子，原田広枝，末永陽子	４．巻 38
２．論文標題 授業設計における看護教員の思考自己評価尺度の開発	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本看護科学学会誌	６．最初と最後の頁 356-364
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630./jans.38.356	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 坂美奈子
２．発表標題 看護教員の継続教育の実態と課題
３．学会等名 日本看護学教育学会第２８回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 SakaMinako, HaradaHiroe, SuenagaYoko
２．発表標題 Development of a Thinking Evaluation Scale in Instructional Design for Nursing Faculty
３．学会等名 East Asia Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂美奈子，原田広枝，末永陽子，瀬戸山美和，道面千恵子
２．発表標題 看護教員を対象とした協働参加型授業改善プロクラムの構築
３．学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂美奈子，原田広枝，瀬戸山美和，道面千恵子，石橋美香
２．発表標題 看護教員を対象とした協働参加型授業改善プログラムの検証-プログラム実践による学びの視点から-
３．学会等名 日本看護学教育学会第30回学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	道面　千恵子 (Domen Chieko) (80363357)	九州大学・医学研究院・助教 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関